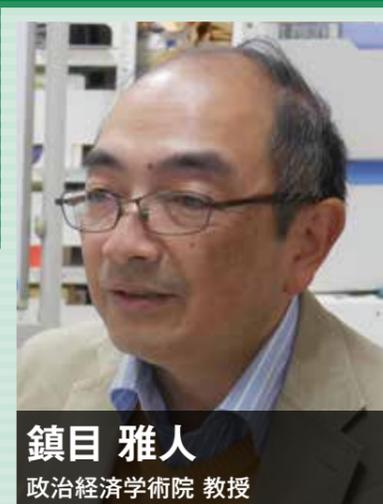


わせポチからのコメント投稿で、 大教室での学生間 インタラクションを活性化

学生のスマホやPCから回答させ、その結果を瞬時に開示できる「わせポチ」は、通常はクイズ形式で利用されることが多い。鎮目教授はこうした使い方にとどまらず、コメントを投稿させることにも活用。授業への参加意識や学習意欲を向上させるだけでなく、学生同士のコミュニケーション活性化に成功し、大きな手応えを実感しているという。



鎮目 雅人
政治経済学術院 教授



学生発表へのコメントを全員に投稿させ、 フィードバックする

政治経済学部の英語学位プログラムとして設置されているこの授業は、履修生の約8割が留学生で、すべての講義は英語で行われる。日本の近現代における経済史を学ぶという内容で講義を2回続けた後、3回目の授業では6人ずつのグループが発表するというサイクルで運営されている。授業1回につき6つのグループが各8分間ずつの持ち時間で、講義で扱ったテーマについて調べてきた内容を発表する。

グループワークは、この授業における重要なポイントとなっている。「学んだことを自分の言葉でしゃべるといって意味で、プレゼンの体験自体にも意味があります。それ以上に、グループワークによる共同作業で何かをつくるという経験はとても重要だと考えています」。履修生の多くは1年生で、この授業が秋学期に設定されていることもあり、9月に入学したばかりという学生も多い。「ほぼ全員が初対面同士なので、単に授業を聞いているだけでは隣に座っただけの関係に終わってしまいます。せっかく多様なバックグラウンドの学生が集まっているのだから、グループワークを通して一種の異文化体験ができる機会を作りたいのです」。

そのグループワークをより効果的に実践するために活用されているのが、わせポチだ。発表担当以外の聞いている学生は、その発表の仕方や内容などについて、自由なコメントをその場でわせポチから投稿する。わせポチへのログインは学生の学籍番号と紐付いており、この投稿が出席点として成績に反映されるシステムだ。

出席点を獲得するには発表を真剣に聞いてコメントする必要があるため、授業の参加意識が高まる。その結果、履修生144名のうち毎回120名程度は出席しているなど、出席率も高い。「発表は同じテーマについて3グループずつ行うのですが、グループによってアプローチやまとめ方も違います。グループ同士の対抗心もあるようで、特に自分たちと同じテーマの発表はとても熱心に聞いていますね」。

授業終了後にはそのコメントをダウンロードし、教員側で一度目を通した上で、その日のうちかその週末ぐらいまでには、誰の

コメントかわからない形にして、発表したグループのメンバーにフィードバックしている。「よほど極端な意見は考えますが、今のところみんなまじめに書いてくれているので、ほぼすべてをそのまま見せています」。

発表した学生はコメントを読むことで、自分たちの発表内容がどうだったか、何が良かったか、悪かったかという具体的な評価を知ることができる。「だいたいは褒める内容が多いですが、たまに厳しいコメントを書く学生もいます。上級生になればゼミなどで発表する機会もありますから、1年生のうちに他人からクリティカルなコメントをもらう経験も役に立つはず」。

発表グループ内でも 相互評価に利用

発表するグループは全員が前に出て発表してもよいし、資料の作成係と発表係など、担当を分けてもよい。発表の評価はメンバー全員の一括となるが、活躍した学生とそうでない学生との不公平を考慮するために、発表終了後に共同作業への貢献度を学生たち自身に相互評価させている。

これはメールを使って個別に集めるが、教員だけが見られるものとして、自分を誰がどう評価したかは分からないようにしている。「グループ内だけの名簿をつくり、自分自身を含めたメンバーを1~3の3段階で評価させます。1や3を付ける場合には、どのような理由でそのように評価するのか具体的なコメントも書いてもらっています」。これにより、リーダー的な役割をした、あるいは1度も集まりに来なかったなどのプラスマイナスの要素が、成績に反映される。

講義の回では 小テストとして利用

また、学生の発表を行わない講義の授業の際には、授業の終わりにわせポチを使って小テストを行っており、これが参加点となる。「その日のポイントとなることについて140字以内で書かせる問題を用意しています。選択式にしないのは、文字を入力する

という作業を通じて、その日学んだ内容について自分の頭で考えてほしいからです。質問があれば、それもわせポチから投稿してもらいます」。その内容は授業終了後に確認し、理解が不足していると感じられる点について次回の授業の冒頭で補足したり、質問に答えたりしている。

2017年度は履修生は100名程度だったが、「楽しかった」「役に立った」という口コミ評判が伝わり、翌2018年度には150名程度に増加した。「初年度は3回講義で1回発表というサイクルでしたが、全員に1回ずつ発表させるために、2018年度は2回講義で1回発表というサイクルに変更しました」。

その結果講義に当てる時間が減ってしまう分を補足するために、講義の授業開始前には毎回論文を1本読んでくることを課した。必ず読んでくるというモチベーションを持たせるために、授業の冒頭で、その論文を読んでいれば答えられるような問題を、ランダムに指名して答えさせている。「答えられないとみんなの前で恥をかくので、みんなちゃんと読んでくるようになりました」。

自分のやりたい授業を 実現するツールとしてICTを利用する

鎮目教授はもともとICTが得意というわけではないが、「便利なものはどんどん使えばいい」と捉えている。わせポチを知ったときも、その機能を見てみて自分にとって有益な活用法はどんな形がよいかを考えたという。「私の場合は、100人規模の授業でも学生と1対1のコミュニケーションができ、それをまとめた形で集計したり学生に還元したりするためのツールとして、大変役立っていると感じています。学生にしてみれば、自分の発表に対して100人以上の学生から直接コメントをもらえる機会というのは、そうそうないことでしょうから」。

同時に、他に便利なやり方があればICTにこだわることはないとも考えている。同じテーマの授業を日本人学生対象にも行っているが、そちらでは学生からの質問などのコミュニケーションは、紙に書かせて提出させているという。「日本語なら紙に書いてもらったほうが読みやすいからです。留学生の英語は直筆だと読みづらいことも多いので、わせポチから投稿してもらうことにしまし

た」。その結果、学籍番号順に並べ替えるなどの処理が楽になった上、紙で受け取るのでは手間がかかりすぎて不可能なフィードバックも簡単にできるというメリットがあった。「プレゼンを聞きながらリアルタイムにコメントを書いてもらえるので、この方法は一度定着するととても便利です」。

一方で、日本語の授業でのみ使っている利用法もある。たとえば、講義の途中で「この状況であなたならどうするか?」と問いかけてわせポチから回答させ、回答結果と実際の歴史上の事実とを比較して解説するというような使い方だ。「その場で聞いたことをすぐ集計して見せられるのはとても効果的です。ただ、このような質問は日本史の基礎知識や各自の認識がある日本人学生相手だから意味のあることなので、英語プログラムの授業では導入していません」。

自分のやりたい授業のために便利なものがあるならおおいに活用する。それが鎮目教授のスタンスだ。この英語プログラムの授業においては、鎮目教授が理想とするグループワークを中心にした授業に、わせポチを導入したことで、学生たちのモチベーションは上がり、意欲的な発表につながっている。「人数の多い授業でも、わせポチを使えば学生同士のインタラクションを巻き起こし、インターラクティブな授業ができるという確信が得られました。とりあえずやってみたこの方法は、私としては満足できる成果に結びついたと感じています」。